

氏 名	朴 真 完
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 332 号
学位授与の日付	平 成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学位論文題目	「朝鮮資料」の新研究

——中・近世日韓語の対照から——

論文調査委員	(主 査) 教 授 木 田 章 義	教 授 大 谷 雅 夫	助教授 大 槻 信
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、いわゆる「朝鮮資料」に『海行摠載』の諸文献を加え、「朝鮮資料」の性格を明らかにし、「朝鮮資料」によって、実際に、両言語のそれぞれの変化を、的確に捉えることができることを明らかにしたものである。これまでは日韓両国語が対訳文として掲載されているという、資料としてかけがえのない優れた点を十分に利用してこなかった。本論文では、日韓両国語の文章を徹底的に対照することによって、朝鮮資料に見られる中世・近世の日韓両国語の言葉の相互干渉による表現を摘出し、その資料性を明らかにした上で、両言語を丁寧に比較することによって、両言語の変化の細部まで明らかにできることを示した。

「朝鮮資料」の中、『捷解新語』は、日本語の原文に韓国語の対訳文をつけ、対訳方式で本文ができています。そのため、互いの言語が相手の言語の干渉を受けることは避けられず、対訳文の韓国語には、当時の資料には現れない奇妙な表現が出現する。そのような表現を整理し、その原因を探ることによって、日韓両国語の表現の違い、文法のずれなどを明らかにすることが出来る。また、「朝鮮資料」が韓国語の資料としても有効に利用できるようになる。

第一章では、「朝鮮資料」の研究史の概略を述べ、『海行摠載』収載の各資料が「朝鮮資料」として利用できることを明らかにし、「朝鮮資料」の各文献の特徴を述べた。

第二章では、両国語に現れる誤謬を、言語干渉という観点から分析を行なった。これはこれまで取られなかった方法である。まず、2.1節では、日本語の「四つ仮名」表記を対象に韓国語からの干渉を論じた。「四つ仮名」を記すために使われた韓国語の摩擦音・破擦音の音韻体系は、日本語の体系と異なる点が多い。[z][dz]の音を持たない、つまりジ・ズの発音を表す文字がない韓国語では、「四つ仮名」を区別して転写することは困難である。従って、「四つ仮名」をかき分けるためには、ある程度の人工的な操作を必要とする。「朝鮮資料」の各文献の「四つ仮名」を写したハングルを整理し、『捷解新語』ではジ・ズは△で、ヂ・ヅはㄷで表記していること、『方言集釈』はジ・ズをㄷで、ヂ・ヅを△で表記すること、『倭語類解』ではジ・ズ・ヂ・ヅを全て△で表しているという実態を明らかにした。そして、このような表記法は、現実の音価を表すためのものというよりは、「四つ仮名」を、符号で書き分けるようにしてかき分けたと考えてよいと推定した。それぞれの文献に、規範的な綴字法があったが、それぞれ、規範に外れる表記も存在している。それらは、例外と処理できるが、特に興味深いのは、『方言集釈』の例外で、この資料では、ジ・ズはㄷで、ヂ・ヅはㄷで表すが、混同する例は、一例を除いて、ジ・ズをㄷで表記する例ばかりである。この現象は、当時の日本語の実態とはちょうど反対の現象である。これはキリシタン資料のローマ字写本に見られる傾向と同じであり、キリシタン資料では、そこに音声の介在を想定している。この『方言集釈』の場合も、筆者が漢語の専門家であり、日本語については詳しくないため、誰かに日本語を発音してもらい、それを書き取っていったために、ジ・ズの発音をヂ・ヅと捉えてしまったと考えるべきであろうということを論じた。

また、2.2節では、『捷解新語』を対象に日本語からの干渉を受けた韓国語の表現について論じた。いわゆる日本語的表現は、語形成に関わる複合語と派生語、統辞構造に関わる格助詞、数量詞構文、形式名詞、また表現面ではコロケーション

(collocation), 慣用表現に見られることを統計的に示した。特に, 原刊本『捷解新語』の対訳文には, 日本語的表現が数多く存在し, 近代韓国語研究資料として利用するにはいささか注意が必要であることを指摘した。

『捷解新語』の対訳文(韓国語)に見られる日本語の影響を受けた表現は, 改訂するたびに, 削除されたり, 許容可能な表現に直されている。原刊本の日本語的表現は重刊本においては数量的には半分程度にまで減少しているのである。『捷解新語』の対訳(韓国)文は, 重刊本に至れば, ほぼ, 近代韓国語の研究資料として利用できるのである。

一方, 朝鮮資料の対訳形式を活用し, 両国語の史的記述を試みたのが第3章である。まず第3.1節では, 『捷解新語』の原文(日本語文)の改訂と対訳文(韓国語文)の変化との関係について検討した。日本語文の改訂による, 固有語, 漢語などの語種の変化を調べてみると, 改修本では和語を漢語に入れ替える例が多く, それに対応して, 韓国語でも漢語に変えられた例が多い。また, 一旦, 和語から漢語に変わった単語については, 重刊本までそれが維持される傾向がある。『捷解新語』における語種改訂は, 漢語化の方向にあったこと, また, 韓国語もそれに対応して漢語に変わってゆくことが確認できた。『捷解新語』は, 倭学訳官を対象にした教科書であり, 外交実用書としての役割を果たしたため, 外交実務に相応しくない言葉を, 改まった表現に置き替える必要があったのだろう。漢語は当時の日本でも荘重な響きがあると感じられており, 和語による表現よりも高級な表現と認められていた。そのために漢語へと語種を変えていったのであろう。

3.2節では, 『捷解新語』の三本(原刊本, 改修本, 重刊本)に現れる韓国語の変化を日本語と対比し, 『捷解新語』の改訂を通じて見た韓国語の変遷について考察した。変遷過程の中で, 注目すべきことは, 理由を表す連結語尾‘-기에’(～の)の形成と引用助詞‘-고’(～と)の登場である。特に, 改修本『捷解新語』に出現する引用助詞‘-고’は, 韓国語史上, 最初の例と判断される。また『捷解新語』から見た近代韓国語への変遷における特徴は, 簡素化と分析化, 明確な表現の追求であったことを確認した。

「朝鮮資料」研究の発展は, 新資料の発掘によって促進される。第4章では, 「朝鮮資料」の範疇の中に, 新たに含めた資料についての語学的解釈を試みた。

まず第4.1節では, 朝鮮通信使の紀行録を集めた『海行摺載』に散見する地名表記を中心に, 本書の中・近世日本語史資料としての可能性を検証した。『海行摺載』は, 国内文献やキリシタン資料が見逃している日本語の現象についての韓国人の分析があり, 当時の韓国人の目から見た日本語の記録が記述されている。さらに, 『海行摺載』に収録されている韓国語との類似点・相違点についての観察は, この資料の価値を高めている。中でも, 本書の地名表記からは, 中世・近世日本語の音声を観察できることは特筆に値する。具体的には『海行摺載』の各文献の表記の変遷を分析することによって, 円唇性の[u]と平唇性の[ɯ]の区別のある韓国語の特徴から, 日本語のス・ズ・ツ・ヅの[u]母音が, 平唇音の[ɯ]に変わっていった経過を跡づけ, 全てが平唇の[ɯ]に変わった時期が, 18世紀中頃であったと推定できることを明らかにした。

4.2節では, まだ学界に紹介されていない両足院所蔵『日韓書契分類』(1725年頃)と『対韓録』(1811年以後)を中心に, 所載口訣に対する語学的解釈とともに, 口訣の採録過程について考察した。口訣資料は, 見出し語・日本語訳・ハングル読みのそれぞれに着目し, 通訳官の著した学習書類付載のもの(『倭語類解』『和語類解』), 以酏庵の輪番僧の作った外交実務書類付載のもの(『日韓書契分類』『対韓録』), そして見聞録類収載のもの(『象胥紀聞』)の三つのグループに分けることができることを示した。

以酏庵の口訣資料は, 『倭語類解』『和語類解』『象胥紀聞』と比べると, 見出語や口訣に対する日本語訳, ハングル読みに違いが見られる。以酏庵の資料には, 当時使用されていなかったと思われる口訣が載せられたり, 誤訳が存在している。これは, 口訣の収録方法の違いに依るのであろう考えられる。学習書類の口訣は, 韓国の日本語通訳官が, 自らの用いる口訣が, 日本語のどのような助詞, 助動詞にあたるかを知るためのものであるのに対して, 以酏庵の資料は, 韓国から送られた外交文書の中に使用されていた口訣を, 文書の読解のために, 解読し, 採録したものであろう。そのとき, 実際の漢文脈の文章から, 口訣の部分を抜き出すことになるが, 誤って本文の一部を口訣に含めて抜き出したと見える例があることも, その推定を支える。

本論文によって, 「朝鮮資料」の資料性が明らかになり, 資料として, より正確に活用できるようになった。また, 実際の分析において, 「朝鮮資料」がこれまで考えられていた以上に, 日本語史の細部を組み立てる材料になることも明らかになった。

論文審査の結果の要旨

本論文は、朝鮮資料と呼ばれてきた資料群に「海行摠載」を加えたこと、朝鮮資料と呼ばれるそれぞれの資料の性格を明らかにしたこと、実際に、資料として分析することによって、韓国語と日本語の音韻体系の微妙なずれから、これまで誰も気づかなかった音声変化が跡づけられることなどを明らかにし、「朝鮮資料」の価値を格段に高めたものである。

日本語と韓国語の対訳資料・対音資料である「朝鮮資料」は、本来、日本語部分も韓国語部分も分析し、総合して考察してゆくべき資料であったが、日本語史、韓国語史の両方に詳しい研究者がいなかったために、それぞれの言語の部分だけの分析に終始してきた。本論文の筆者は、韓国語学の専門家として修士課程を修了したあと、「朝鮮資料」の日本語部分の研究のために来日した。韓国の「国語学国文学」から、日本の「国語学国文学」に留学した訳である。本論文の筆者によって、韓国語学的分析と日本語学的分析の両方の分析が、同時に行われたのは、「朝鮮資料」研究の一つの時代を画する出来事である。

朝鮮資料の中核となるのは、「捷解新語」という、通訳・外交官のための日本語教科書で、本文の日本語を、ハングルで翻訳し、発音を示した資料である。「捷解新語」は、原刊本（1676）、改修本（1748）、重刊改修本（1781）と改訂されていたので、その変化をたどることによって、日本語、韓国語の変化をあきらかにすることができる。まず、改訂の実際を丁寧に分析し、改訂が誤りや不自然な表現を訂正する以外に、和語を漢語に置き換えてゆくという方向性があること、改まった表現へと変更していることを明らかにした。それらの変更は、外交交渉にふさわしい、荘重な表現に変えようとしたためであろうと結論する。また、両方の言語に不自然な表現が出現するが、その多くが、相手の言語の影響によって生じていることを明らかにした。たとえば、「念をいれる」という日本文に対して、「念」を漢字で表記し、「を」「入れる」という韓国語を使って翻訳しているが、当時の韓国語では「念」は、「～をする、～を言う、～を応じる」と使われるもので、「念をいれる」という韓国語訳は、日本語を直訳してできた不自然な表現であるとする。このような形で、「捷解新語」の日韓語の相互干渉を克明に調査し、一覧表にまとめ、朝鮮資料の資料性を明瞭に位置づけた。これらの相互干渉の表現を排除してゆくことによって、それぞれの言語の変化が正確に分析できることになる。

これまで朝鮮通信使の記録と理解されていた「海行摠載」所載の資料が、語学資料としても大きな発言権があることを実証したのも、大きな成果である。「朝鮮資料」の範囲が大きく広がり、予想外の重要な現象が指摘できることを示した。

日本語の「う」母音に対して、韓国語では円唇性の[u]と平唇性[ɯ]の区別がある。「海行摠載」所載の資料の表記から、18世紀中頃には「つ」が[ɯ]の母音であったらしいこと、そして「づ」「ず」「ず」の順番に平唇化していったらしいと推定した。この推定はまだ確定的な結論とはいえないが、円唇性・平唇性の「う」の区別を持つ韓国語の特徴を利用した成果であり、これまで、朝鮮資料によってこれほど細かな音声変化が証明できるとは、誰も想像もしていなかった。また、「四つ仮名」の表記の混乱は、「方言集釈」では、「じ」「ず」を「ぢ」「づ」で表記した例がほとんどであるという、当時の日本国内の資料とは正反対の現象を指摘した。そして「方言集釈」の表記には音声が存在したのではないかと推定する。キリシタン資料のローマ字写本にも同様の現象があり、音声を介在して表記していったと解釈することは合理的である。具体的な編纂過程はまだ明らかにできないが、「方言集釈」の成立についての重要な糸口を提供している。

以上のように、本論文は、朝鮮資料研究の一つの時代を画するものとなっているが、筆者が韓国語学出身であるためか、分析の方向が韓国語学の問題点に傾く傾向があり、日本語研究者には、わかりにくい引用例や用語がある。また、分析表が精緻であるのに比べて、論述に性急なところがある。ゆったりと、論じてゆく姿勢があれば、もっと確定的な結論が出せたと思われるところもある。

以上、審査したところより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年9月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。